

連載—三六年間の教育を振り返る⑤—

ゆとりのなかった「ゆとり教育」でした

—二〇〇二年度の学習指導要領—

「ゆとり教育」とは、一九八〇年代から二〇一〇年にかけて行われた教育のことを指し、二〇〇二年度から始まる学習指導要領がその中身を具体化したものです。但し、「ゆとり教育」という文言は、後付けであり、「今年からゆとり教育が始まります」と言ったものではありません。二〇〇二年度の学習指導要領は、「生きる力」を前面に打ち出した改訂だったのですが、「生きる力」よりも、学力低下をもたらした「ゆとり教育」という否定的なニュアンスを持って広く知られるようになっていったのです。

さて、「ゆとり教育」と言いますが、当時の教育現場は全くゆとりをなくしていました。と言うのも、学校週五日制が始まり、土曜日がなくなり授業時間数そのものが減ったからでした。元は週六日で行ってきた授業を今度は五日でやることになったのです。それにも関わらず改訂の目玉である「総合的な学習の時間」を週三時間増やしました。そのために、教育内容を上の学年に先送りしたり、「学習内容を三割削減（小中学校）」これは当時の新聞の見出し、

各教科の年間時数を減らしたりした結果、週や学期によって教科の時間数が変わるといいう大変いびつな時間割となつてしまいました。

その後、学力低下という批判を受けて、上の学年に先送りした学習内容が元に戻ってきました。しかし、時間割はもう一杯であり、入れる所がありません。入らないものだから、朝の15分を3コマ、15×3=45を一時間としてカウントするモジュールというやり方を採用したり、土曜授業を再開したりする学校も出たりします。（下田小ではモジュールを採用し、水木の朝の時間を国語の時間としています。）

学校週五日制になった時点で、ゆとりなんてなく過密になり、学習内容が戻って来た分、超過密の時間割を今、子どもたちに強いているのです。本当に子どもは可哀想だし、「申し訳ありません」と頭を下げたい思いで一杯です。

私が教師になる前からの教育の流れ

1971	学習指導要領改訂 現代化カリキ	今回はこの 辺りのお話
1980	学習指導要領改訂	
1985	小学校採用となつた養護学 校で体育教師として教師が始まる。	
1988	養護学校から小学校へ	
1992	学習指導要領改訂 新学力観（個性をいかす教育） 生活科の導入	
2002	学習指導要領改訂 ゆとり教育「生きる力」 総合的な学習の時間 完全週五日制	
2003	歯止めの撤回（発展的な学習）	
2011	学習指導要領改訂 脱ゆとり	

今、私が思うに、学校週五日制、「総合的な

学習の時間」を同時に進める必要があったのかどうかと言うことです。これは、今だからこそ言えるのかもしれませんが、いろんなことを同時に進めすぎた。これが「ゆとり教育」の失敗だと思ふのです。「総合的な学習の時間」に至っては、五、六年は元々三時間であったのが、今では二時間になってしまいました。一時間分は、外国語（英語）の時間となったのです。「総合的な学習の時間」が目玉であるはずなら、こんなことはしません。私には、英語を導入するために使われた「総合的な学習の時間」ではなかったのか？とひねくれた見方をついしてしまいます（この話は別の機会に）。次回は、学校週五日制についてのお話をします。

—子どもの日記から—

低迷する児童会活動

第四回目 満君の日記から

以前に勤めた学校では、児童会行事で、「ラオケ大会」というものがありました。児童会がやりたいことを企画して行ったものです。昼休み体育館に集まり、カラオケを流して歌うといったイベントです。出場は学年問わず自由、見学も自由、全員が見なければならぬというしほりもなく、遊ぶ子どもは運動場で遊んでいるのです。どれだけ人を集められるかというのは、児童会にとつては重要なことで、参加人

数によってその企画が成功だったのかその指標となります。自分たちで企画の総括をします。「カラオケ大会」の他にも、「スポーツ大会」（低一すもう、中一ドッジボール、高一バスケ）「かくし芸大会」（習い事の特技や漫才など）「大声コンテスト」「くつとぼし大会」などなど。いろんな企画がありました。

下小でも、「一年生をむかえる会」や「六年生を送る会」などの児童会行事があり、それはそれなりに楽しい行事なのですが、子どもの発想ではなく、学校行事として形式化されています。子どもの発想で企画・運営させるそのような体験を高学年になったらぜひ経験させたいのですが、第一、話し合わせる時間的な余裕がありません。代表委員会はありませんが、時間の確保ができないので、どうしても休み時間にくることになります。休み時間がなくなるので、代表委員会は子どもには不人気で、それに出なくてはならない各委員会の委員長には、なかなかなりたがりません。児童会活動は形骸化しており、魅力ある行事を教師が用意していないなと感じています。児童会活動が低迷しているのは、下田小に限らず、今はどこの学校でも同じ課題だと言えるでしょう。

さて、満君の日記です。どうして「与作」を歌うことになったのかはわかりませんが、クラス2人の男子が出演することになりました。しかし、「与作」のカラオケが見つからず困っていたのでカセットテープを買ってあげました。家ではお母さんが衣装まで作ってください

って、大会に臨んだのですが、その日を忘れてしまっていたという日記です。

□「カラオケの修業」 満

ぼくは、今度、聖大君とカラオケ大会に出ます。歌う歌は『与作』です。

初めは、かんたんのように思っていたけど、歌ってみると、なかなかおむずかしいです。家でお母さんと練習したけど、うまくいきません。

それで、つたやにテープをかりにお兄ちゃんに行ってもらったら、『ごぶし』という曲がありますと、店の人にすすめられました。お兄ちゃんは、北島三郎のファンだと思われたようで、とてもはしかしかったと言っていました。

しかし、数日間たったら、先生からカラオケのテープをもらったので、初めて本当の声を聞きました。

ぼくは、聖大君と息が合うかとても心配です。今は、とても大好きな昼休みのサッカーも休んで『与作』の練習をしています。

もし、予選に通ったら、はでないしように作ってくれとお母さんが言っていました。予選に向けて、もうひとがんばりです。

1997.12.1

□「最悪のカラオケ大会」 満

ぼくは、カラオケ大会の予選で通ったので、集会で全校の前で「与作」を歌うことになった。お

母さんは、ぼくが予選を通ったことになっていたので、本番に向けてのいししょうを必死に作ってくれていた。だけど、ぼくには一つ不安なことがあった。それは、集会でカラオケ大会の日が、いつあるのかわからないことだった。ぼくは、十二月の中ごろにあると思っていたけど、その考えは少しあまかったようだ。

十二月の初めの月曜日、ぼくがいつものように学校に行った。学校につきかけに、だれかが、「今日カラオケ大会やで。」

とぼくに言った。ぼくは、その人の言葉をうたがった。でも、本当にその日がカラオケ大会だったのだ。そして、集会が始まるカラオケのテープがなかったのに気がついた。ぼくと聖大君は必死にテープをさがしたが、テープはなかった。家で練習して、そのままになっていたのだ。だから、ぼくは、テープなしで歌うことになった。

歌っていると、最初はもりあがっていたけど、最後になると、シーンとなってきた。それで、結局、優勝したのは、『かわいい人』を歌った人たちだった。

家に帰ってそのことをお母さんに話すと、「ほんまに、バカやなあ。今までのいししょうはどうなんねん。」

と言われておこられた。

1997.12.17